

タイでひろがる広島 —ものづくりネットワーク—

木 村 弘
(広島修道大学)
(商学部准教授)



1. 広島地域と自動車産業

広島地域には自動車メーカーのマツダを支えている部品メーカーが集積している。戦争で焼け野原になったこの地に、裾野の広い部品群を必要とする自動車産業が形成されたことは、素直に賞賛に値するだろう。これまでに、高度経済成長期、バブル経済、リーマンショックなど、景気の浮沈を地域全体で経験し乗り越えてきた。

マツダは他の自動車メーカーに比べて海外展開が遅れていると言われる。国内生産の8割を輸出に頼る体質ゆえの意見である。しかしながら近年、海外展開を活発化し、グローバル生産を着実に進めているのも事実である。マツダの海外進出にともない、多くの「Tier1」も進出している。2014年に量産を開始したマツダ・メキシコ工場は、地場を代表するTier1も進出したサプライヤー・パークを形成し、今後の展開が期待されている。

ここで取り上げるタイのものづくりネットワークは、メキシコよりもディープだと言われる。比較的治安もよく、早くから日系企業が進出してきたタイでは、駐在員の行動も活発に行われている。特に、マツダとフォードが運営するオートアライアンス（タイランド）（以下、「AAT」）が立地するラヨン県や隣接するチョンブリ県には、広島地域からの駐在員たちによるものづくりネットワークが形成されている。

2. ふたつのネットワーク

(1) 仕事を支えるフォーマル・ネットワーク

バンコク日本人商工会議所が著した『タイ国経済概況（2016／2017年版）』によると、ここ数年タイの自動車生産は厳しい状態が続いているという。各社は「エコカー」プログラムの恩恵にあずかるため、対象となる環境対応車を一定量生産しなければならず、輸出拠点としての位置付けが強まることが予想されている。さらに、「アセアン自由貿易地域」（AFTA）において自動車分野は自由化が遅く設定されてきたが、今後はアセアン域内での水平分業体制が促進される方向にある。タイは自動車産業の集積が進んでいるがゆえに、アセアン地域の生産ハブとして優位性を保持する重要性が指摘されている。

AATの近隣には、タイでも地場を代表する部品メーカーが軒を並べている。その一社にダイキョーニシカワ（タイランド）（以下、「DNTH」）がある。フォードがマツダに経営参画した時期に部品メーカーが合併して誕生したダイキョーニシカワが母体である。

当時、部品調達をめぐる試行錯誤が繰り返されていたが、2000年代に入り、マツダと地場企業の間を見直すJ-ABC活動（J：地場、Achieve Best Costの略、地場の部品メーカーと

ベストなコストを達成する取組)がスタートした。この活動は現在、タイでも実施され、地場企業の現地工場を中心として11社が参画している。DNTHを含めた各社の連携はA (ASEAN) - ABC活動を通じて密であり、フォーマル・ネットワークが強化されて競争力を高めている。

さらには2015年、マツダパワートレインマニュファクチャリング (タイランド) (以下、「MPMT」) がトランスミッションとエンジンの量産を始めた。MPMTの近隣には、(株)オンド (旧音戸工作所)、トーヨーエイテック(株)、広島アルミニウム工業(株)、広島精密工業(株)が進出し、基幹部品についても広島地域を基盤にしたフォーマル・ネットワークが形成されている。こうした関係性をもとにして、競争が激化するアセアンでの優位性を強化しようとしている。

(2) 生活インフラとなるインフォーマル・ネットワーク

こうした取引の連携を陰で深めているのが、インフォーマル・ネットワークともいえるべき存在である。これは仕事をベースにしたフォーマルな関係ではなく、「地縁」を共有する人々が自発的に集う場である。

例えば、タイには「カープ会」なるものがある。正式には「広島カープを優勝させる会タイ支部」という。プロ野球の広島東洋カープをこよなく愛する人々の集まりである。定期的に会合を開き、思い思いにカープ談義に花を咲かせる。2016年はリーグ優勝したこともあり、大いに盛り上がったという。2017年の盛会も言うまでもない。ここでの出会いは慣れない海外生活で困った時に役立つ地域コミュニティの機能も持つ。日常生活を無事に送るうえで貴重な存在になっている。

その他、広島のソウルフードであるお好み焼屋も一役買っている。バンコクでは、広島風のお好み焼きを扱う店が開業している。広島の起業家による出店である。オペレーションのほとんどはタイ人であるが、店長が「本場」のお好み焼を提供し、衛星放送でカープ戦を見ながらお好み焼きを食べることができる。馴染みのソースひとつで心は地元に戻る。もちろん、ラーメンやチョンブリ方面でも広島らしさを提供する飲食店があり、ものづくりネットワークを陰で支える重要な存在であるのは言うまでもない。

3. まとめ

雑駁であるものの、ここまでタイでのものづくりネットワークについて取り上げた。大切なのは仕事がかうまくいき、私生活も充実することに違いない。フォーマル・ネットワークが盤石に形成され、現地でしかるべき成果を任期中にあげて帰国する人、現地で仕事を続ける人もいる。海外の自動車づくりを日系企業、特に広島の地場企業が支えているのは誇らしいことである。

他方、仕事をうまく回すためには現地の生活を充実させる必要もある。そのインフラとして、インフォーマル・ネットワークの存在を取り上げた。ここは仕事も頭の片隅に残ってはいるものの、広島らしさを共有しながら、現地で頑張っている人々がリフレッシュして、心を充電させる存在である。日本国内の若者顔負けに、現地の「オヤジ」たちはLINEを活用した異業種の会合を機動的に開いて意見交換をしている。これも立派なインフォーマル・ネットワークである。

これらふたつのネットワークがかうまく機能してこそ、海外のものづくりが円滑に行われ、人々の生活も充実させることが可能となる。中小企業と大企業の二重構造は縮小したほうが良いが、ここで論じたネットワークの「二重構造」はさらに密接になって、人々をつなぐ存在であってほしい。